

プーチンとウクライナ、アメリカ一般人のその認識

【訳者注】いつか見た、テレビ“日曜討論”の元防衛大臣も、外務大臣も、たまたま聞いた元外交官の話でも、「プーチンとウクライナ」について、論者がその悪質さの「代表的な例」と言っている“主流メディア版”を信じておられるらしいとわかって、驚いたことがある。このサイトはこの問題について、何度となく、その真相の説明（翻訳）を載せているが、この記事はプーチン自身の口から聞く、決定版と言っていいだろう。「プーチンの話がなぜ信じられるの？」という人があるかもしれないが、それは、プーチンのこれまでの語録を見たことのない人の言うことである。彼が世界から信頼されているのは、その言葉と行動の誠実さによってである。

わが国の政府がプーチンに近づくのはよいことだが、「あなたのウクライナ問題での悪辣さは知っていますよ」などという腹で近づくなら、ちょっと待ってほしい。もっと勉強してからにしてほしい、恥をかかないように。

Robert Parry

June 13, 2017, Consortiumnews.com

Oliver Stone（プーチン・インタビューの映画を作り、“Gary Webb 報道の自由賞”を得た）とのインタビューで、ロシアのプーチン大統領は、ウクライナ危機についての彼の考えを説明したが、それはアメリカの主流メディアが、アメリカ人に聞かせることを許されている話とは、対照的なものである。



今日の主流メディア・パラダイムがアメリカでどう働いているかの代表的な例は、ウクライナ問題であり、アメリカ人民は、民选的に選ばれたヴィクトル・ヤヌコヴィッチ大統領の2014年の追放は、アメリカの支援するクーデタによって、暴力的なネオナチ過激派の先導したものである

証拠から、目隠しされている。

ニューヨーク・タイムズの教えているところでは、ウクライナにクーデタはなかった、アメ

リカの介入などなかった、それほど多くのネオナチさえいなかった。そして、続いて起こった内戦は、ヤヌコヴィッチ支持者の間の、彼の不法な追放に対する抵抗運動ではなかった、そうではなく、それは“ロシアの侵攻”または“ロシアの侵略”だった。

<https://consortiumnews.com/2015/01/06/nyt-still-pretends-no-coup-in-ukraine/>

もしあなたが、この統制思考から逸脱しようものなら——もし、米國務次官ヴィクトリア・ヌーランドが、アメリカはウクライナに 50 億ドルを費やしたと語ったことを指摘したりするなら、もし、クーデタ前に盗聴された、彼女とジェフリー・パイヤット (Pyatt) 米大使との電話で、新しいリーダーを誰にしようか、どうやってこれを“つなぎ合わせ (glue) ”、どうやって“このものを無事産ませるか (midwife this thing) ”を相談していたかに触れたりするなら、もし、ヌーランドとジョン・マケイン上院議員が、暴力的な反ヤヌコヴィッチ運動家たちを睨んでいたことを暴いたりするなら、もし、狙撃兵が極右の占領するビルから警官や抗議者たちを殺して、ヤヌコヴィッチの劇的追放を推進したことを認めたりするなら、そして、もしあなたが、こうしたことすべてはクーデタのようだと考えたりしたら、——あなたは間違いなく“ロシアのプロパガンダと偽情報”の犠牲者だということになる。

<https://consortiumnews.com/2014/02/23/neocons-and-the-ukraine-coup/>

<https://consortiumnews.com/2016/07/11/nato-reaffirms-its-bogus-russia-narrative/>

<https://consortiumnews.com/2014/09/08/seeing-no-neo-nazi-militias-in-ukraine/>

<https://consortiumnews.com/2014/03/30/ukraines-inconvenient-neo-nazis/>

しかし、ほとんどのアメリカ人は、おそらく、クーデタを暴露するそのような証拠のことを聞いたことがないだろう。それは主流メディアが基本的に、そのような逸脱した事実を、一般ニュースから禁止しているからである。もし万一それが公にされたら、それらは“フェイク・ニュース”とひと括りにされ、彼らは、そのような厄介な情報をインターネットから追放するアルゴリズムが、やがて現れることを願っている。

<https://consortiumnews.com/2017/05/02/nyt-cheers-the-rise-of-censorship-algorithms/>

そこでもし、アメリカ人が、オリヴァー・ストーン『プーチン・インタビュー』の第3部を“ショウタイム”で見て、ロシアのプーチン大統領が、ウクライナ危機についての彼の見方を説明するのを聞けば、プーチンという核保有国の指導者は、何という嘘つきだと呆れるかもしれない。

微妙なニュアンスの見方

実は、プーチンのウクライナ危機についての説明は、かなり微妙なところがある。彼は、1991年のソビエト連邦崩壊後に、国家資産が、強いつながりのあった“寡頭政治家”に売

り渡されて以来、ウクライナを支配するようになった、墮落に対する純粋な民衆の怒りがあつたことに注目する。

プーチンは、多くのウクライナ人が、欧州連合（EU）と連携すれば、この問題が解決するかもしれないと感じたことを認めている。だが、それはロシアにとって問題をつくり出す。なぜなら、ロシアとウクライナの間に関税が存在しなかったことと、ウクライナにとって特に重要な、双方向貿易の未来についての心配があり、これが 1,600 億ドルの損失になる怖れがあつたからである。



2014年5月2日のウクライナ、オデッサにおける残忍な放火事件のスクリーン・ショット。犯行は右翼ウクライナ国粋主義者によるもので、ロシア系の人々数十人が殺された。

ヤヌコヴィッチが、この問題をよく検討してみるために、EUとの合意を延期しようと決意したときに、抗議が起こったのだとプーチンは言った。しかし、その時点から先は、プーチンの物語は、米政府や主流メディアが米国民に教えている話とは、違って来る。

「我々の欧と米のパートナーたちは、この人民の不満という馬に乗ることを考え付き、何が本当に起こっているかを見定めようとししないで、彼らはクーデタの支援をすることにしたのです」とプーチンは言った。

マイダン抗議における暴力は、ヤヌコヴィッチによるものだとする米政府とは反対に、プーチンは言った——「ヤヌコヴィッチは、市民に対して武器を用いる命令は出ませんでした。ところがたまたま同時に、我々の西洋のパートナーたちは、彼が武器を用いるどんな命令をも出さないように、影響力を用いてくれと、我々に求めてきたのです。彼らはこう言いました、〈我々はあなた方に、ヤヌコヴィッチ大統領が武力を用いないように、禁止することを求める。〉そして彼らは約束しました…我々は反対派が、広場や政府の施設を空にするように、あらゆる努力をするであろう、と。

「我々は言いました。〈よろしい、それはよい提案だ。我々はそのように努力しましょう。〉

そして、ご承知の通り、ヤヌコヴィッチ大統領は、武器を用いるという手段に訴えはしませんでした。そしてヤヌコヴィッチ大統領は、この事態にどう対処していいか、他に方法が考えられなかった、と言いました。彼は武器使用の命令に、サインすることができなかったのです。」

プーチンは、2014年2月20日の、1ダース以上の警官と数十人の抗議者を殺した、発砲の責任者については特定しなかったが、彼はこう言った、「いったい誰がこのような狙撃兵を配置したでしょうか？ 利害のある当事者でしょう。この状況をエスカレートしたがっている者たちでしょう。…我々は、武装集団が、ウクライナ自体の西部で、ポーランドで、また多くの他の場所で、訓練されていたという情報を手にしています。」

2月20日の流血の後、ヤヌコヴィッチと反対派リーダーたちは、2月21日、ヨーロッパ3か国政府の仲介と保証による合意書に署名した。それは早期に選挙を行うことと、一方で、ヤヌコヴィッチの権力の縮小を約束するものだった。

政治的取引を無視する

しかし反対派は、ネオナチや他の過激国粹主義の戦闘家に先導されて、この合意を無視し、政府の建物の占拠をエスカレートさせた。しかしNYタイムズや他のアメリカの説明は、ヤヌコヴィッチは単に職務を放棄したと、国民に信じさせようとするものだった。



ウクライナの Azov 部隊兵士のかぶっているヘルメットの、ナチスの印を見よ。——ノルウェイの映画クルーに撮影され、ドイツのテレビに放映された。

「それはクーデタに支給される援助を正当化するのに使われるやり方です」とプーチンは言った。「大統領が、この国の2番目に大きい都市ハルコフに、国内の政治的集会のために出かけると、武装した者たちが大統領官邸を占拠しました。そんなことがアメリカで起こったと想像してみなさい。もしホワイトハウスが占拠されたら、それを何と呼びますか？ クーデタか、それとも誰かが床掃除にきたとでも？」

「検事総長が狙撃され、安全保障高官の一人が負傷しました。そしてヤヌコヴィッチ大統領自身の自動車列が狙撃されました。だからそれは、権力の武装による奪取以外の何ものでもない。それだけでなく、後にヤヌコヴィッチは、我々の助けを得て、クリミアに居場所を変

え（そこで彼は1週間以上滞在した）、反対派との合意（2月21日）に署名した人々が、礼儀ある民主的な法的手段によって、この紛争の解決を試みるチャンスがないか、希望をもちました。しかしそれは決して起こらず、もし彼がつかまれば、殺されることが確実になりました。

「すべてをねじ曲げ、何百万の人々を騙すことは、もしメディアの独占という手段を用いるなら可能です。しかし結局は、公平に見ている人々の目には、何が起きているかは明らかです——クーデタです。」

プーチンは、いかにキエフの新しい政権が、ロシア語の使用を直ちに制限しようとし、ロシア系の住民が人口の大多数を占めるドンバスと呼ばれる東部地域で、いかに過激な国粋主義的政策が取られたかを説明した。

プーチンは続けて言った——「まず、警察を使って彼ら（ロシア系住民）を逮捕する試みがなされましたが、警察は直ちに住民の側につきました。そこで、中央政府は特殊部隊を使い始め、人々は夜中に連行されて投獄されました。確かに、ドンバスの人々はその後、武装するようになりました。」

「しかし一度これが起こると、ウクライナ南東部の人々との対話どころか、敵意はますます燃え上がり、ウクライナ政府高官たちは特殊部隊を使い、直接、兵器を使い始めました——戦車や軍用機さえも。多数のロケット発射器から住宅地帯への攻撃があり… 我々は繰り返し、この新しい指導部に、過激な行動をやめるように訴えました。」

しかし、この内戦は悪化するばかりで、第2次大戦以来、ヨーロッパで行われた最悪の暴力によって、何千人の人々が殺される結果となった。しかし、アメリカの主流メディアは、この危機の責任は、もっぱらプーチンとロシアにあるとした。

クリミア事件

黒海に突き出したクリミア半島は、歴史的にロシアの一部であり、ソビエトの分裂以後も、そのセバストポリに、大きなロシアの海軍基地が置かれてきた土地であるが、そのクリミアのいわゆる“併合”についてのプーチンの説明もまた、アメリカ人が聞かされている話から、鋭く逸脱している。

オリヴァー・ストーンがこの“併合”について訊ねたとき、プーチンはこう答えた——

「我々がクリミアを併合したわけではありません。クリミアの市民がロシアに加わる決定をしたのです。クリミアの法制に基づいて選挙された合法的なクリミア議会が、国民投票を通告しました。議会は圧倒的多数をもって、ロシアに加わることを決めたのです。

「ウクライナのクーデタは、その後に暴力の大波が続きました。そして、クリミアに対し、自分をロシア人と考え、ロシア語が母国語と考える人々に対して、ナショナリストが暴力を用いる恐れさえありました。そして人々は心配になりました——彼らは身の安全のことで頭がいっぱいでした。

「これが該当する（ウクライナとの）国際協定によれば、我々ロシアには、クリミアの我々の軍事基地に、2万人の人員を置く権利がありました。我々は、代議員政府であるクリミア議会が集合して、法に従って行動を取ることができるように、便宜を図ってやらなければなりませんでした。

「人民は安全を感じなければならぬ。そうです、我々は人々が投票場へ行くことができる条件を作ってやりました。しかし我々はどんな敵対行動も取らなかった。クリミア人民の90パーセント以上が繰り出し、投票しました。ひとたび投票が終わると、(クリミア) 議会は、国民投票の結果に基づいて、ロシア政府に対し、ロシア連邦に編入されることを求めました。

「ウクライナは領土を失いましたが、それはロシアの立場によるものでなく、クリミアに住んでいる人々の取った立場によるものです。この人たちは、ナショナリストの旗の下で生きてくはなかったのです。」

ストーン監督は、ウクライナが、ロシアの海軍基地を NATO に明け渡したかもしれないという、プーチンの述べた心配に疑問を呈した——「たとえ NATO がウクライナ合意をしていたとしても、新しい兵器をもつロシアには、脅威にならないと思いますが…」とストーンは言った。

プーチンは応えて言った——「私は脅威を感じます。それは、NATO がひとたび、この国やあの国に入ってくると、その国全体の政治的リーダーシップが、国民全体とともに、軍事的インフラの配置に関する決定を含む、NATO の決定に逆らえないという事実にあります。非常に敏感な兵器システムでも配備することができる。私は弾道ミサイルの迎撃システムのことを言っているのです。」

プーチンはまた、米政府が、ウクライナの情勢を利用して、敵対的な反ロシア宣伝をしていることにも触れ、こう言った——

「初めにウクライナに危機をつくり出しておいて、彼ら（米高官たち）は、ロシアに対するそのような態度を煽り立てています。ロシアを敵として、潜在的に可能な侵略者と見ているのです。しかし、あらゆる人々が間もなく、ロシアから発する脅威など全くないこと、バルト諸国にも、東ヨーロッパにも、西ヨーロッパに対しても、ないことを知るでしょう。」

危険な睨み合い

プーチンはまた、アメリカの駆逐艦「ドナルド・クック」が、バルト海を通過して、危機のさなかのクリミア半島へ向かっていたこと、しかし、ロシアの航空機がこれを脅かし、ロシアが短距離防衛装置をオン状態にしたとき、引き返していったという、あまり知られていない危険な対決のことも明らかにした。

ストーンはこの状況を、“キューバ・ミサイル危機”に例えている——ソビエト軍艦が、ケネディ大統領がこの島の周囲に設けていたブロックードを、突破する試みをやめて引き返した、あの事件である。しかしプーチンは、この米駆逐艦（複数）との対決を、それほど深刻なものとは考えていなかった。

プーチンは言った——「ひとたびクリミアが、ロシア連邦の完全な一部になったとき、我々のこの領域に対する態度は劇的に変わりました。我々の領土に対する脅威が見られたら、そしてクリミアは今ロシアの一部ですが、どんな他の国とも同様に、我々はあらゆる手段を尽くして、我々の領土を護らなければならないでしょう…

「私はこれを、キューバ・ミサイル危機と比較する気はありません。なぜなら、あの時には、世界は核による終末の瀬戸際にありました。幸い、今度の場合は、状況はそこまで深刻ではありませんでした。確かに我々は、我々の最も進んだ、最新の沿海防衛システムをここに配備していますが…

「確かに、クリミアに我々が配備しているようなミサイルに対しては、駆逐艦「ドナルド・クック」のような船は全く防衛が不可能です… 我々の司令部は、常に、ロシア連邦の防衛のためには、どんな手段でも用いる権限を与えられています… そうです、確かにそうなれば、非常にまずいことになったでしょう。ドナ

（追放されたウクライナ大統領、ヴィクトル・ヤヌコヴィッチ）

ルド・クックは、我々の領土のあれほど近くで、何をしようとしていたのでしょうか？ 誰が誰を挑発していたのでしょうか？ 我々は、我々の領土を護ろうと決意しているのに…

「この駆逐艦の位置がわかり、発見されたとき、彼ら（米乗組員）は危険があると見て取り、船自体がミサイル・システムの標的になっていると知ったようです。船長が誰だったか私は知りませんが、彼は大きな自制を示しました。彼は責任感のある人物だったと思います。その上、勇気のある将官でした。彼が取った決断は正しかったと思います。彼は状況をエスカレートしない決断をしました。これ以上進まない決断をしました。これは必ずしも、我々のミサイルに攻撃されただろうという意味ではありません。しかし我々は、我々の沿岸が、ミサイル・システムで防備されていることを、彼らに示さねばなりませんでした。

「船長は直ちに、彼の船が、ミサイル・システムの標的になっていることを見抜いた。彼はこの種の状況を発見する特別の装置をもっていた… しかし実際、我々は、いわば瀬戸際に追い込まれたのです… 全くその通りです。我々は何とか応答しなければならなかった。そうです、積極的な対話でもよかったです。我々は、政治的な示談を可能にしようと、あらゆる努力をしてきました。しかし彼ら（米高官たち）は、この憲法に反する権力奪取を、支援しなければならなかった。私は今でも、彼らが、なぜそうしなければならなかったのか不思議です。」

やはりこれも今でも不思議なのは、なぜアメリカの主流メディアは、核戦争の対決の危険がますます迫っているのに、アメリカ国民を、異なった見方から必死に守らねばならないのか、ということである。

プーチンの論じている他の問題については、[ここをクリック](#)。プーチンをインタビューするストーンの流れ儀について更に詳しくは、[ここをクリック](#)。

<https://consortiumnews.com/2017/06/13/how-vladimir-putin-sees-the-world/>

<https://consortiumnews.com/2017/06/12/oliver-stone-reveals-a-vulnerable-putin/>

——以上